

ヒューマンエラーは、なぜ起きる？



だれの責任か？ではなく、どうすれば防げたのか？

人は人であるがゆえに、ヒューマンエラーをなくすことはできません。しかし「なぜ、エラーは起きるのか？」など、人間特性の理解が対策の第一歩となります。そして、背後にある「誰でも共通して陥りやすい要因」を探り出して、連鎖するエラーチェーンを切る対策を講じていくことが重要です。ここでは、明日の業務にすぐに活用できる「ヒューマンエラー対策」を紹介します。

このような、ヒヤリとした経験はありませんか？

事例 ①

到着時刻に間に合うよう先を急いでいる中、対向車両が来なかったので前方車両を追い越そうとしたところ、前方車両が右折を開始。急ブレーキを踏んで対処した。

原因

一点集中が招く死角
「注意のトンネリング」

トンネルの中にいると出口以外、外の様子が全く視界に入らないように、何かに集中していると近くのこと意識が向かなくなる、トンネリングに陥ります。本事例では、到着時刻や対向車線が気になり、ウinker指示などの前方車両の状況を見逃していた可能性があります。



対策

「焦り」は危険のサイン。
追い越し前は深呼吸をして再確認

「焦り」を感じたら、視野が狭くなっているサインだと捉え、深呼吸をするなど、自分を落ち着かせるように意識しましょう。特に追い越し時は、時間に余裕があるときでも気持ちが急いでしまう傾向にあるため、再度念入りに周囲を確認してください。

事例 ②

普段は交通量や事故が少ない交差点に差しかけた際、優先道路ではない道を走行中にもかかわらず、減速や安全確認をせずに進入し、右から来た車と衝突した。

原因

“いつも大丈夫”の罠
「利用可能性ヒューリスティック」

人は強く印象に残る記憶や、思い出しやすい情報を基に判断を下すヒューリスティックという思考を持っています。本事例では「過去に事故がなかった」という経験に頼り、安全確認を怠りました。出会い頭事故のリスクを軽視し、不用意に交差点へ進入したと考えられます。



対策

過去の経験に頼らない、
「だろう運転」からの脱却

頭に浮かびやすい情報で判断する人間の特性を理解し、実際の状況を見極めることが大切です。自身の行動を振り返り、「だろう運転」を防ぎましょう。過去の経験を過信せず、常に安全第一の行動を意識してください。

川瀬 翠（かわせ みどり）

MS&AD インターリスク総研株式会社 運輸事業者および一般企業向けに、事故防止に向けた安全管理体制構築支援、事故実態分析調査等のコンサルティング業務、管理者・運転者向け研修講師を中心に活動。